はじめに

昨年度、重点を「ICT の効果的な活用」とし、これまでの実践と ICT の強み・特性とのベストミックスを目指した研究を進め、成果として ICT を効果的に活用することによって児童生徒がより主体的に学習に取り組むようになったということが挙げられた。

一方、課題として、個別最適な学びでは「児童生徒にとって最適な学習方法の発見につながる手立て」が、協働的な学びでは「協働的な学びで得られた学びの成果が個に返り、全ての児童生徒が学びの成果を実感するための手立て」がそれぞれ挙げられた。

そこで、今年度はこれらの課題の解決を目指し、研究の重点を「児童生徒の振り返りと教師の学習評価の充実」とし、児童生徒が学習を進める過程において、どのような振り返りをすることが、最適な学習方法の発見や、学びの成果を実感することにつながるのか。また、教師はどのように学習評価をするべきなのかということに焦点を当て、研究を進めていきたいと考えた。

≪今年度の研究の重点≫

児童生徒の振り返りと教師の学習評価の充実

令和４年度　研究の成果と課題

― 個別最適な学び ―

成果

○一人一台端末を活用して、教師から提示されたルーブリックや学習資料、友達の意見等を自分のタイミングで見直すことができる状態にすることで、自分のペースで学習を進めることが可能となり、学習に粘り強く取り組む姿や学習を調整しようとする姿へとつながっていた。

○教師から提示された学習方法ではなく、一人で学習を進めるか、友達と相談しながら学習を進めるか、ノートを使用するか、端末を使用するかなど、学習方法を子ども自身が自然に判断して取り組むことは、自分の学びを自分で進めていこうとする主体的に学習に取り組む態度へとつながっていた。

課題

●昨年度の反省同様、それぞれの児童生徒にとって最適な学習方法を見付けることは難しいと感じた。すぐに最適な学習方法の答えを求めるのではなく、様々な学習方法をたくさん経験したり、自分で学習方法を選択する機会を増やしたりしながら、時間をかけて徐々に見付けさせていく必要がある。

― 協働的な学び ―

成果

○ICT を活用することで、多くの意見を瞬時に共有することが可能になり、他者の意見を参考にすることや意見を比較することへとつながっていた。また、同時編集をすることは、意見の共有や整理だけでなく、子ども同士の自然な話し合いを促す手立てとなっていた。

○ICT を活用しながら互いの意見を説明し合うことで、自身の考えを分かりやすく表現しようとする姿をみることができた。また、ICT を活用して、友達同士で評価したりされたりすることは、より多くの意見に触れることや、新たな視点への気付き、学びの深まりへとつながっていた。

課題

●一人一台端末によって、これまではできなかったことができるようになり、授業改善へとつなげることができた。今後は、個でそれぞれ考えたことを全員で共有するとともに、共有して得られた学びの成果が再び個に返り、学習の成果をすべての子どもが実感するような手立てや場面の充実が必要である。

Ⅰ　何ができるようになるのか

○振り返り

『学習指導要領解説　総則編』では、各教科の指導に当たって見通しを立てたり振り返る機会を設けたりするなどの指導を通じ、「児童の学習習慣の定着や学習意欲の向上が図られ学習内容が確実に定着し、各教科等で目指す資質・能力の育成にも資するものと考えられる」としている。これを受けて、本研究では振り返りの目的を以下の３つに設定し、児童生徒と共有しながら目的の達成を目指す。

≪振り返りの目的≫

①学習習慣の定着　②学習意欲の向上　③学習内容の確実な定着

○学習評価

学習評価の在り方ハンドブック（文部科学省　国立教育政策研究所教育課研究センター　令和元年6月）』では「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。」としている。つまり、評価とは終末にテストの点数や提出物、作品など、結果でのみするのではなく、教師の指導改善や児童生徒の学習改善に向けたものでなくてはならない。そこで、本研究では学習評価の目的を以下のように設定する。

≪学習評価の目的≫

①教師自身の指導の改善　　②児童生徒の学習改善

この“何ができるようになるのか”という目的の達成に向けて、「①学習習慣の定着　②学習意欲の向上　③学習内容の確実な定着　のために児童生徒は学習の中で“いつ”“何を”“どのように”振り返るのか」また、「教師は①教師自身の指導の改善　　②児童生徒の学習改善　のためにどう児童生徒の学びに寄り添うのか」ということについて研究を進めていく。

Ⅱ　いつ振り返るのか

学習指導要領では、学習評価の実施に当たって「評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」としている。また、文部科学省が著作権を所有する『初等教育資料　令和5年4月号』の中で、文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長の石田有記氏は、学習者である子供たち自身が主体的・対話的に深く学べるように学習環境を整える視点の例として「子供たちが既習事項などを足場に、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てる場面を設定するなど、単元の導入を工夫すること」「単元等の途中や終末の段階において、子供たち自身がこれまでの学びを振り返り、自らの成長や変容への気付きを深めるような場面を設定すること」を挙げていた。

そこで、本研究では児童生徒の振り返りを、１単位時間や単元、学習のまとまりの中の、「導入」「途中」「終末」の３つの場面に設定し、すべての場面で３つの目的の達成を目指しながらも、より効果的に振り返りを行うために、「導入」では学習意欲の向上を、「途中」では学習内容の確実な定着を、「終末」では学習習慣の定着を振り返りの重点として研究を進めていく。

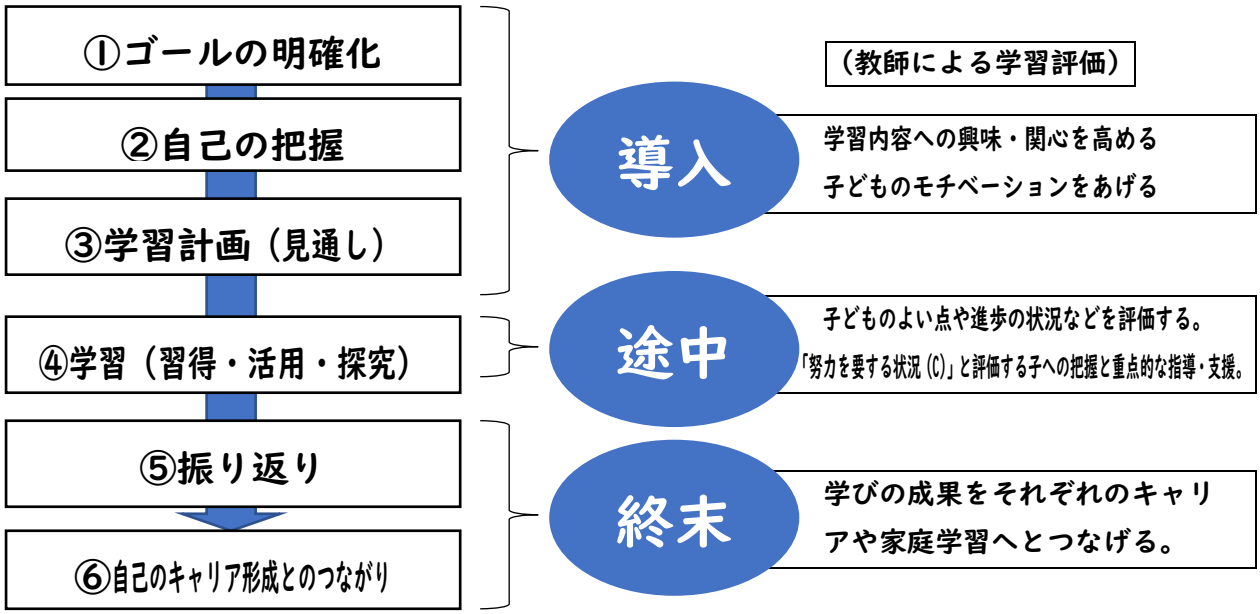
また、それと同時に、各学習過程の中で「活用するメタ認知的知識」、「重点的に行うメタ認知的活動」を明確化し、児童生徒のメタ認知能力の向上を目指す。

さらに、教師はそれぞれの場面で確実に学習評価を行い、子供理解に努めたり授業力・指導力を上げていこうとしたりする授業改善につなげていく。

学習過程	重点	活用する（育成を目指す）メタ認知的知識	重点的に行うメタ認知的活動
導入	学習意欲の向上	課題についての知識	メタ認知的モニタリング
途中	学習内容の確実な定着	課題解決の方略についての知識	メタ認知的コントロール
終末	学習習慣の定着	人間の認知特性についての知識	メタ認知的モニタリング

※詳しくは別紙「メタ認知とは？」を参照

≪学習デザインとの関わり≫



Ⅲ　何を振り返るのか

「導入」「途中」「終末」のそれぞれの学習過程において、以下のような振り返りの視点を児童生徒と共有しながら研究を進めていく。

「導入」「途中」「終末」という学習過程の中で児童生徒がそれぞれの学びを効果的に振り返り、学習課題に対して粘り強く取り組んだり、自己の学びを調整したりしながら主体的に学習を進めることで児童生徒の“学習習慣の定着”や“学習意欲の向上”、“学習内容の確実な定着”へとつながっていくと考える。

なお、これらの視点は例であり、これらの振り返りを毎時間必ず行うというものではない。学習のねらいや児童生徒の実態、発達段階等に応じて、この中から選択したり、新たな視点を設けたりしながら、児童生徒の学びの成果が最大化していくことを目指す。

学習過程	振り返りの視点の例	期待される児童生徒の姿
導入	これまでの学び（関連する既習事項の確認） ルーブリックに対する自己の学習状況の把握 過去の学習方法	学習意欲が向上している姿 主体的に学習方法を選択する姿
途中	ルーブリックに対する現在の理解度 そこまでの学習の過程 それまでの学習方法 自己の振り返りの批判的な検討	学習への粘り強さを発揮しようとする姿 自己の学習を調整しようとする姿 学習内容が定着している姿
終末	ルーブリックに対する自己の理解の状況 学習や認知の過程 自分の変容・成長 学習方法 新たな疑問 自己のキャリアとの関わり 自己の振り返りの批判的な検討 次の学びへの期待や願い 他の単元・教科との関連	自己の成長や学びの成果を実感する姿 自己に適した学習方法かを考察している姿 学びを自己のキャリアや他教科、家庭学習などへつなげていこうとする姿 次の学びへの期待や願いをもつ姿

Ⅳ　どのように振り返るか

学びの成果を自覚させたり、それぞれの児童生徒にとって最適な学習方法について考えさせたりするには、『振り返りの視点』に対する自己の状況を正確に捉えさせる必要がある。

本研究では、振り返りの方法について以下の通り例示し、その中から教師が選択して振り返らせたり、児童生徒自身が選択したりするなどしながら、それぞれの児童生徒の自己の学びや成長への気付きを促していきたい。この振り返りの方法についても、『Ⅲ　何を振り返るのか』と同様、学習のねらいや児童生徒の実態、発達段階等に応じて、柔軟に設定していく。

また、その際、教師は児童生徒の学習へのモチベーションの向上や、不安の解消、学習への自信につながる声かけや働きかけをしていく。

学習過程	振り返りの方法の例	教師の声かけ（働きかけ）の例
導入	レディネステスト	レディネステストをして、新しい学習の土台となる知識や技能を確認しましょう。テストが分かった人は自信をもって学習を進めましょう。分からないところがあった人はまずはそこから一緒に学習を進めましょう。
	学習内容の系統表の活用	学習内容の系統表を見ながら、これまでの学習とのつながりを確認しましょう。
	学習課題に対して使える知識の想起	この学習を進めるに当たって必要になる知識や技能はどのようなものか考えてみましょう。また、思いつかない人は友達と一緒に考えてみましょう。
	それまでの学習方法の想起	これまでに自分がどんな方法で学習を進めてきたのか、思い出してみましょう。これまでの学習の仕方を思い出せない人は先生に聞いてください。
	ルーブリックの活用	ルーブリックで確認した自分のゴールに向かってどのように学習を進めていけばいいのか、これまでの自分の学習の仕方を振り返りながら、計画してみましょう。思いつかない人は先生のおすすめを聞きに来てください。
途中	そこまでの学習を振り返る	・学習の途中ですが一度これまでの学習を振り返ってみましょう。 ・これまでの学習で「だれと」「何をした」のかを書いてみましょう。 ・今の段階でどんなことが分かったか、どんなことが分からなかったのか書いてみましょう。 ・他の人の学習の方法や成果を見たり聞いたりしてみましょう。
	認知の過程を振り返る	はじめと比べて自分の考えが何を見て、何を聞いて、何をして、どのように変わってきたのか、振り返ってみましょう。それぞれの時間でどう変わったのかが書けるといいですね。
	自分の振り返りの検討	自分の書いた「振り返り」を読み直し、もう一度自分の学習過程や、その時考えたことなどを確かめてみましょう。
	他者との振り返りの共有	友達の振り返りを見てみましょう。友達の意見や考えにはどんなものがあるのかを確認して、自分と同じところでつまずいている人と一緒に考えたり、分かった人に聞いてみたり、終わった人は説明し合ったりしてみましょう。
	チェックテスト	チェックテストを受けて、ここまでの学習の成果を確認しましょう。どこまでわかってどこからがわからないのかがわかったらすてきですね。

	そこからの学習について考える	・今の方法で学習を進めるのがよいのか、他のやり方があるのか、考えてみましょう。 ・他の方法と今の方法とどちらがいいか比べてみましょう。 ・この方法でここまでわかったのですね。すばらしいですね。 ・ここまできたら、ゴールまでもう少しですね。粘り強くがんばりましょう。 ・行き詰っている人は先生のおすすめの方法を聞きに来てください。
終末	学習のねらいに対する到達度の自覚	この学習はどんな資質・能力を育成するための時間で、その達成のために自分はどんな方法で学習し、その結果、どこまで資質・能力が伸びたのか、振り返ってみましょう。
	ルーブリックに対する自己評価	ルーブリックを見ながら自分の到達度を自己評価してみましょう。どんなことが分かって（できて）、どんなことが分からなかった（できなかった）のか書けるといいですね。
	身に付いた知識・技能の自覚	この学習ではどんなことを覚えたり、できるようになったりしましたか。そのことは他のどんな学習や生活の場面で活用できますか。
	育成された思考力の自覚	この学習では、どのように問題を解決したり、考えを形成したり、新しいものを作ったりしましたか。また、問題を解決したり、考えを形成したり、新しいものを作ったりする力は伸びましたか。
	育成された判断力の自覚	この学習では自分の結論を決定するためにどんな判断や意思決定をしましたか。また、結論を決定するために必要な判断や意思決定する力は伸びましたか。
	育成された表現力の自覚	この学習では、伝える相手や状況に応じた表現をすることができましたか。また、伝える相手や状況に応じて表現する力は伸びましたか。
	学習の過程を振り返る	学習の導入から、今日の学習まで「だれと」「どんな方法で」「どれくらいの時間」「どんな努力をしながら」学習を進めてきたのか、また、「だれのどんな考え」に触れ、その考えは「自分にどんな影響」を与えたのか、それによってどのように「自分の考えが変わってきたのか」などということについて時間を追って振り返ってみましょう。
	満足感や充実感の振り返り	この学習で自分はどんなことに満足したのか、どんなことが楽しかったのかなど、学びを通して得られた気持ちをくわしく書いてみましょう。
	複数の単元を関連付けて振り返る	学習内容の系統表を確認しながら、前に同じ系統の「〇〇（単元名）」の学習で学んだことをこの学習で活用・発揮することができたかも振り返ってみましょう。
	他教科と関連付けて振り返る	この学習の中江、他教科で学んだことの中から活用できたものがあれば書いてみましょう。
	学習方法の振り返り	今回自分で選択した学習方法が自分に合っていたか、理解が深まったのかどうかを書きましょう。また、次はどんな学習方法で学習を進めたいのかも考えてみましょう。
	協働的な振り返り	グループで学習したことで得た成果や課題、よかったこと楽しかったことなど、グループで話し合いながら書き出してみましょう。
	次の学びへつなげる振り返り	この学習を終えた今、まだ疑問に思うことやもっと調べたい事、もっとやってみたいと思うことを書き出しましょう。そのことを家庭学習で取り組めばもっと学習が深まりそうですね。
	自己のキャリアとの関わりについて考える	この学習で身に付いたいろいろな力は、自分の生活や将来とどのような関わりがありますか。

Ⅴ　教師はどのように児童生徒の学びに寄り添うのか

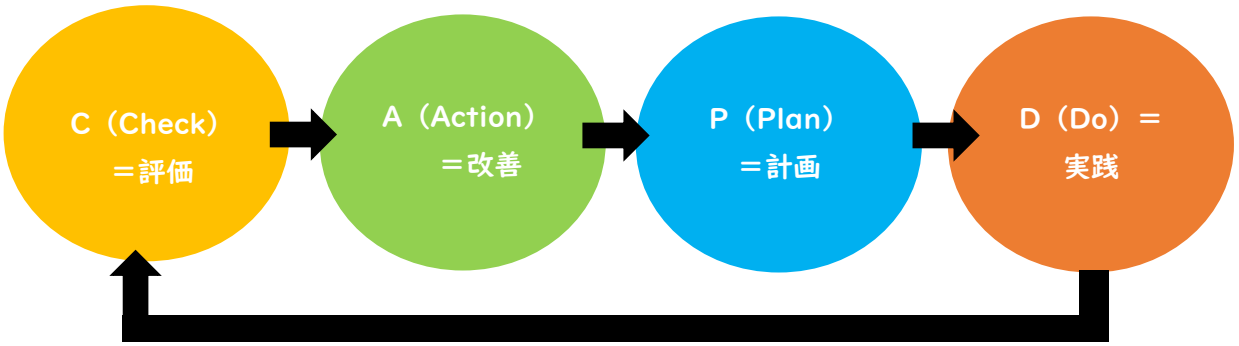
児童生徒が自己の学習を振り返り、振り返ったことをそれぞれの学びの充実や自己のキャリアなどへとつなげていくためには、授業者である教師が一人一人の学びに寄り添っていくことが必要不可欠であり、教師の指導改善と児童生徒の学習改善に向けた学習評価を充実させることが重要である。

本研究では、「CAPD サイクル」を通して教師の指導の改善を、「個人内評価の充実」を通して児童生徒の学習改善をそれぞれめざした研究を進めていく。

Ⅰ　「CAPD サイクル」

「PDCA サイクル」は「P（Plan）＝計画」→「D（Do）＝実践」→「C（Check）＝評価」→「A（Action）＝改善」を繰り返すことにより継続的に改善していくことを目指している。この「ＰＤＣＡサイクル」を回すことにより、目標や行動、課題や問題点が明確になることで、無駄がなくなったり課題の解決やモチベーションの維持につながったりするなどといったメリットがあるといわれている。

本研究では、より効果的にこのサイクルを回すために、授業を展開する上で最も重要な「D（Do）＝実践」をゴールに見据え、児童生徒の実態を的確に把握する「C（Check）＝評価」から始まる「ＣＡＰＤサイクル」を通して、学習評価の改善を繰り返し、児童の学びに寄り添いながら児童生徒の学びの充実を図っていく。



①「C（Check）＝評価」…児童生徒の状況を的確に捉え

②「A（Action）＝改善」…適切な改善方法を考える

③「P（Plan）　＝計画」…適切な目標と計画を立てる

④「D（Do）　　＝実践」…実践の質を高める

２　「個人内評価」

個人内評価とは、一人一人の子供について、他と比べるのではなく、優れている点や可能性、過去と比べて進歩した点などを積極的に評価するものである。

児童生徒の振り返りは、基本的にはそれぞれ個人で行い、自己の学びについての自覚を促すものである。児童生徒の振り返りを充実させるためには、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感することができるよう、一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価することが必要不可欠である。

本研究では、この個人内評価を充実させた学習評価を行い、児童生徒が安心して学習に取り組むことができる学習環境づくりに努める。

≪個人内評価の例≫

・子供たちの学習意欲を高めるために一人一人の子供理解に努める。
・子供の変容を認める指導を積み重ねる。
・よい点や進歩した点を積極的に児童生徒に伝え、学習したことの意義や価値を実感できるようにする。
・結果だけでなく、過程を評価する。
・豊かな学びの姿、新たなよさを教師自身がとらえて児童生徒に伝え、子供が自信をつけるようにする。
・子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援する。
・児童生徒が、自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をする。

など